



口内炎に関する研究ーベーチェット病やがん患者における検討

内藤 真理子 大学院医系科学研究科 歯学分野 口腔保健疫学 教授

疾患の一症状としての口内炎は、摂食や発音等の障害につながることで日常生活の質に与える影響は小さくないと推察されます。また、有害事象としての口内炎予防は重要な課題と言えます。本稿では、筆者がかかわってきた口内炎に関する研究をご紹介します。

1. ベーチェット病患者を対象とした口内炎とQuality of life (QOL) に関する研究

ベーチェット病は日本をはじめ、韓国、中国、中近東、地中海沿岸諸国に多発し、1972年当時の厚生省がもっとも早く難病に指定した疾患です。口内炎は、ベーチェット病患者の初発症状として多く認められます。

本研究は、ベーチェット病患者の口内炎の期間有病率および口内炎発症とQOLの関連について、一般集団と比較検討することを目的としました (Genet Res Int, 2014)。ベーチェット病患者675名と一般集団1,097名を対象に、自己申告による口内炎の発症状況とQOLの関連について検討しました。

過去1年間において、ベーチェット患者の84%ならびに一般集団の31%が口内炎を発症していました。一般集団と較べて、ベーチェット病患者はどの年代においてもより低いQOLを示しました。(図)

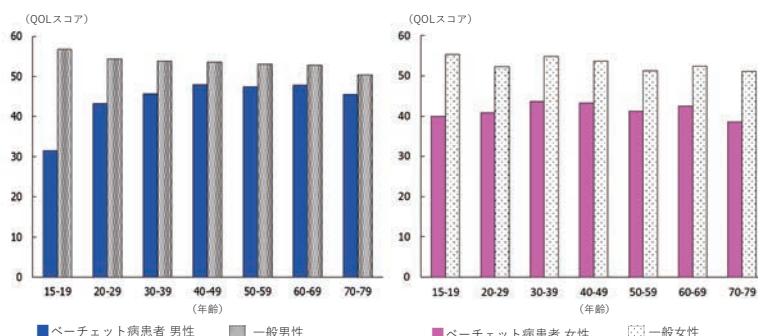


図. 性・年齢別 QOL スコアの比較 (スコアが高いほど QOL が高い)

口内炎発症が年1回以下であった一般集団に較べて、年2回以上口内炎を発症していたベーチェット病患者および一般集団は、国民標準値よりQOLが低下するリスクがそれぞれ6.2倍、2.6倍高まっていました。以上より、口内炎発症はベーチェット病患者のQOL低下に影響を与えていることが示されました。

2. がん患者を対象とした口腔ケア介入研究

抗がん薬物療法において、有害事象としての口内炎対策のひとつとして口腔ケアが推奨されています。エベロリムス投与時の専門的口腔ケアの口内炎発症に対する効果の検証を目的に、研究が実施されました (Jpn J Clin Oncol 2016, Oncologist 2019)。

閉経後エストロゲンレセプター陽性乳癌の遠隔転移によりエベロリムスおよびエキセメスタンの投与を受けた女性患者175例を対象としました。専門的口腔ケア群と対照群の2群に割り付けた後、エベロリムス投与前から両群に処置および評価を開始、投与開始8週間後まで継続しました。対照群はブラッシングおよび含嗽指導を、専門的口腔ケア群はそれに加えて歯石除去、歯面研磨、舌苔除去を行いました。口内炎の発症率 (CTCAE ver3.0) をエンドポイントとして評価しました。

脱落症例を除外した解析において、グレード1の口内炎発生率は専門的口腔ケア群76.5%、対照群89.7%と、専門的口腔ケア群において統計学的に有意な減少が認められました。グレード2の発生率においても、専門的口腔ケア群34.6%、対照群54.0%と有意な差を認めました。以上より、がん薬物療法の際に発生する口内炎に対して、専門的口腔ケアが発症を予防することが示されました。